

天路歴程

(二幕)

人物

安岡 禎 三十八九歳

多津子 安岡の妻、三十五歳

君江 安岡と多津子との間に生れた子、十三歳

中塚幸藏 業家にして多津子の保護者、五十歳

雪子 中塚の兄の娘、十九歳

河村壯吉 醫學士、二十七歳

お時 多津子の内の女中

其他 二三人の男女

第一幕

(音楽教師多津子の内々客間。右手と左手とに各一つ宛の出入口。正面の大きな玻璃窓の左脇にも外廊へ出るドア。それに近く左手の壁に寄せて寝臺一脚、

小卓一臺、中央の圓卓を取巻いて椅子二三脚。夏も終に近き日の午後三四時頃の日光が、外庭の青葉にふりそいでゐる。右手のずつと奥の方から稍やメランコリックなピアノの音が舞臺にまで聞えて来る。對話を妨げない位に、靜かに聞えて居るところにて幕上れば、安岡禎、左手のドアを開けてはひつて来る。)

お時。(安岡のあとを追うてはひりながら) あの、奥様はお稽古の間は何方にも御目に掛らないと仰しやつて居りますから。どなたにも御目に掛らないと——

安岡。いいよ、いいよ、御目に掛るのは後でもいいんだよ。

お時。でもあの、奥様にお歸りしないで、御通しするわけには参りませんから。

安岡。(軽く笑ひながら) だが、もう斯うして通つてるぢやないか。

お時。でも私が後で困りますから。

安岡。(寝椅子の上に腰を下ろしながら) なあに、然う心配する事はない。あとで私から奥様へ——奥様か御嬢様か知らないが、兎に角、その御主人へはよく御詫びをして上げるよ。

お時。(安岡がポケットから葉巻を探り出し、それに火を點ずるのを見守りながら、半ば獨白のやうに) どうしよう。私、本當に困つちまふわ。

(筒里にも悠然たる煙草の煙に壓迫されて、お時は詮方なく幾分の不安を残しながら、後を見返り見返り出て行つてしまふ。安岡、やがて起ち上り、ゆるゆると室内を一廻りした後、後手を組みながら外廊の方へ出て行く。間もなくピアノの音は止んで、右手のドアから多津子が先き立ち、雪子がそれに續いてはひつて来る。)

多津子。(雪子を握きとめるやうに立ちどまつて) まあ、いいでせう。そんなに御急ぎにならなくたつて。お茶でも召上つていらつしやいな。今に、君江も學校から歸つて来ますから、君江が歸つて来たら、久し振りに、御一緒に何か面白い事でもして遊びませうよ。

雪子。でも、今日は御古をするつもりで上つ
たんぢやございせんから。

多津子。(時計を見ながら) 御母様が御心配な
さるんでせうか?

雪子。はあ、一寸御見舞にと申して出たもので
すから。

多津子。本當に済みませんでしたわねえ——わ
ざわざいらしつて頂いたりなんかして。

雪子。どうか、御大切にすつて下さいまし。
多津子。(微笑しながら) もう宜しいんですわ。
それに病氣といふほどの事でもなかつたんで
すから。

雪子。ですから先生は、平生から、お弱く
ていらつしやいますから。

多津子。大丈夫よ。それよりも貴女こそ、近
頃は何か、以前ほど御丈夫に見えないこと
ね?

雪子。(面を背けながら) 然うでせうか?

多津子。然うよ——何だか少し。もし何でした
ら、河村さんに、河村さんにでも、一寸診て
御貰ひになつては?

(河村といふ言葉を聞くと共に、雪子は俯いてしまふ。)

あれでも、今度大學を出たんですから、もう

立派な御醫者様よ、それとも貴女のは、河村
さんちや治らないやうな、念入りの御病氣で
すかしら?

雪子。え? (面をあけて一寸考へ、忽ち再び俯いて) まあ先生、いやですわ——そんな事
を仰しやつて!

多津子。(笑ひながら) 御免なさい。ほんのじ
やうだんよ——今のは、明日からは、必ず
お稽古に伺ひます。どうか御母様によろしく
ね。

雪子。はあ、それでは……

多津子。(お辭儀をして行きかかる雪子の背後
から) 一寸! 雪子さん。

(雪子、立ちどまり、黙つてふり向く。)

よく御似合ひになることね——その御洋服
が。

雪子。あら! いやですわ! 母が、西洋の物
を好きなもんですから、私なんか、何だか
きまりが悪いんですけれど——

多津子。どうして?

雪子。なんだかきまりが悪いんですけれども、
折々は……しかたがないんですの。

多津子。(先きに立つてドアの方へ近づきなが
ら) 然う仰しやれば不思議ねえ——御宅では

御母様がハイカラさんで、そして貴女が、ど
ちらかと云ふと然うではないんだから。

(ドアを開けて二人とも出てしまふ。そ
の後に庭の方でひぐらしが鳴き出し、引
きしほつたカーテンの紐が何かが折々風
に揺れてゐる。)

お時。(左手のドアを開きながら後を振りかへ
り) そして、あの、御名前を伺ひましても、
仰しやらないのでございます。ただ、ふるく
からの御知合ひだからとばかり仰しやいまし
てね。

多津子。(お時のさきに立ちてはひり) お前、こ
ちらへお通したんぢやなかつたの?

お時。(つづいてはひり) おや、どうなすつたの
でございませう? この穿椅子にかけてい
らつしやいましたのに。

多津子。(外廊への出口の方へ歩み寄りながら)
それとも何かしら……

(出口に立つて外をのぞいてゐた多津子
は、思ひかけぬ何物かを見出したること
く、本能的な驚きの叫びを擧げながら、よ
ろよろと後方へよろける。)

安岡。(其時ドアから葉巻をくはへたまふ多津
子を追ふやうにしてはひつて来ながら) どの

みち、餘り作法にかなつた訪問の仕方では、間に合ふまいと思つたものですからね、一寸失禮して、御用の済むのを待つて居りました。(お時の方を顧みて) 女中さんには大變に御氣の毒をしましたね。

(無言の儘、あとしざりに、圓卓のそばまで追ひつめられて来た多津子は、目示と手眞似とで、お時を去らせようとするけれども、お時は其場の光景を氣遣つて去らうとしない。)

多津子。(お時へ)あとでまた呼びますから、あとで！(お時の去つたあと、稍や伏目に、再び太息を漏して) たうとう會ひましたのね。

安岡。さうだ、たうとう會つたといふものだな。多津子。(半ば獨白のやうに) ああ、たうとう會つちまつた。

安岡。會ひたくないのに、たうとう會つたといふのかい？

多津子。よし、どんな事があつても會ふまいとも思つたし、たまには又——

安岡。たまには又？ ふむ。多津子。だけれど、本當は何か何だか分りませんでしたわ。今も矢張分らないんですわ。

安岡。お前はあまり變つてゐないねえ——むか

しと。

多津子。然うでせうか。(鬢のほつれ毛をかき上げながら) 自分ではどれ位變つたか、變らないでゐるか、分りませんけれど。

安岡。いや、やつぱり變つてゐる。争はれないものだ。

多津子。それやあ、何と言つても十年の上、十二年にもなるんですもの。君江が——やつとお誕生を済ましたばかりだつた。あの子ももう——

安岡。然うだ、あの子も今歳は十三になる筈だ。多津子。(脇へ向き、ハンケチを目にあてて) よく覚えてゐて下すつたわねえ。

安岡。ずつと一緒に連れてゐたのかい？ (多津子、黙つてうなづく。)

安岡。然うか。多津子。(向き直つて微笑しながら) 貴方もだ

いぶお爺さんになりましたねえ。安岡。いや、これでも二三年來少し若返つて来たんだよ。あまり下らないことは、考へないやうに、思ひ出さないやうになつたからね。

多津子。貴方も、一通りの苦勞はなすつたらしいのね。

安岡。苦勞か！ うむ、まあまあ、不足はなさうだな。

多津子。憎い女だと、恨んでいらしたの？

安岡。女も恨んでも見たし——男を恨んでるだらうとも考へ直して見たし、それや色々だつたよ。だがもう昔の夢さ。(葉巻の煙のたなびくさきを見やりながら) 然うだ。みんな過ぎ去つた昔の夢さ。

多津子。(卓上の團扇を手に取りながら) それにしても、なんて馬鹿だつたでせう？

安岡。誰が？ 多津子。私が！ いいえ、私達二人が！

安岡。然うか。(瞑目して) まあ、馬鹿だつたと言ふよりほかはあるまいな。あんなつまらない事で喧嘩をして——

多津子。そしてつまらない意地を張り合つてねえ。

安岡。あとさき見ずに、あんなに無造作に夫婦別れをしてしまつてさ。

多津子。それよりも悪いのは、あんな飽氣ない別れかたをしてそれなりに、つまらない意地を張り通してしまつた事ですわ。

安岡。お前、それでも覚えてゐるかい？——俺達の別れたときの動機といふのが、一體どん

な事だつたか！

多津子。それや覺えてゐるわ。覺えてゐるどころぢやないわ。今でこそ笑話にもなるんだけれど、世の中の事を何一つ知らなかつたあの時分の私にとつちや、あれ位大きな問題はありませんでしたもの。(かなり軽い、淡泊な調子で) そそもそは貴方が悪かつたのね。こちらで結婚すると直ぐに亞米利加へ行つて、あんなスキイト・ホウムを作つて——笑つちやいけません。その時分の私達には、あれほど美しい、あれほど尊いものはなかつたんだから——ねえ、あんなスキイト・ホウムを作つて、二人とも無事に幸福に勉強してゐる内、貴方がいつかしら悪いお友達を拵へて——

安岡。さうだ、悪い友達を拵へた俺が、ちとばかり悪い遊びを覺えたと言ふわけだつたな。もつとも妻帯してからの遊びだけに、表面無事のやうに見えるながら、實際のたちはよくなかつたかも知れないがね。

多津子。兎に角、あの時代の私に、我慢の出来ることぢやなかつたわ。

安岡。だが、特に俺の場合を言ふと、あれは一種の反動現象だつたね。こちらの宗教學校や教會などに閉ぢ込められてゐて、悪く清教徒

ぶつた偽善の空氣に窒息しかかつてゐた青年が、本場の歐羅巴人の本當の生活をのぞいて見て、俄かに自由な、自由過ぎるやうな心持になつて見たかつたのだ。そしてそれ以上に格別の意味もなかつたやうだ。だから、あの時分の俺から言ふと、あんな事位であんなに大袈裟に騒ぎ立つた、お前の方が寧ろ無理だつたよ。

多津子。だけど私に私で、耶蘇教の夫一婦主義を理想もなしに注入されてゐた上に、亞米利加へ來て、なまなかな女權思想なんぞに——さうよ、全く——なまなかな女權思想なんぞにかぶれてゐたんですもの。

安岡。それにしても、別れて後の未練がなさ過ぎたな。

多津子。ええ。

安岡。別れたのはまあそんな事で別れたとしても、別れて後に、未練がなさ過ぎたやうに思ふと言ふのさ。

多津子。どちらが？ 私さがさうだと仰しやるの？

安岡。成程なあ。お前から云ふと成程、俺の方があきらめがよすぎたかも知れないな。

多津子。さうよ。本當にあきらめのいい人だと

思つてよ。

安岡。然う思はれて居た俺が、どの位お前から折れて出るのを、そして俺のところへ引き返して來てくれるのを、どの位待つてゐたか、どの位あてにしてゐたか——

(忽ち言葉をやめて、多津子の顔を見る。多津子も目を上げて安岡を見る。)

(強ひて笑ひ出しながら) これは正しく愚癡だつたねえ。

多津子。序に愚癡も言ひ合つて見ませうよ——お互に。現在の私達の生活とは何の關係もない位にずつとかけ離れた話なんでもの。聞かされる方でも、只だ聞き流しに聞いてゐられるわ

(多津子の言葉の終りに近く、カナリヤの鋭い啼聲が聞えはじめると、安岡は手で以て相手の語を押へるやうにしながら、椅子から立ち上る。)

安岡。カナリヤだね！ お前は今でもあの鳥が好きなんだね！ あいつが鳴くのを聞くこと——(椅子を離れて室内を歩き出しながら) いつでも思ひ出すよ、俺達の別れた日の事を！ あの朝の事を！

多津子。貴方もね！

安岡。お前もか、お前もやつぱり思ひ出すのか!

(對話ともつかず、獨白ともつかぬ調子にて) 然うだ、お前の最後の足音が、あの階段の下に消えて了つたとき、何を見るときもな、茫然として室の内を見てゐる内、お前が子供について可愛がつてゐた、あのカナリヤの籠が目についたものさ。そして、きつとお前が、あの籠をとりに来るに違ひない——その用事にかこつけてでも引き返して来るに違ひないと、俺は然う思つたんだ。さう思つて自分で自分を落しつけながら、不可思議な一日を送つたが、日が暮れると流石にもう、ちつとしてゐられなくなり、明るい街の方へ、賑やかな連中の方へと駆け出して行つたんだ。

多津子。其御留守に私が歸つて来たことは、御聞きになつたでせうね?

安岡。お前がカナリヤを持つて行つたことと、俺の着る物なんぞについて、こまごまと言ひ置いてくれたことは、隣のお婆さんからたしかに聞いた。

多津子。私もあの晩には、あんなに用を足さないで置いて歸りたかつたわ——翌日もう一度出直して來られるやうに。だけど牛憎なもののね、こつそい忍び込んだ私が、御主人のゐ

ないあの室から、こつそい出ようとするところを、あの深切なお婆さんに見つかつてしまつたのです。

安岡。それでもう、俺の處へ引き返して來る第一のきつかけをなくしたといふんだね?

多津子。ええ。そしてあの時の失敗が、どれだけその後の勇氣をなくさしたか知れませんか!

安岡。俺はまた俺で、何處にゐるとも居處さへはつきりしないお前の跡を追ふ爲めに、切めてあのカナリヤでも俺の手元に残つてゐたならと、どんなに残念がつたことだと思ふ!

多津子。さうですか?——貴方もね!

安岡。その内に取も、外聞も、痛我儘も、男の意地も、何もかも棄ててしまつた俺は、どんなにしてでもお前を捜し出し、改めてお前の前にお詫びもしよう、性根を入れ換へるとの誓も立てようと、さういふ心にもなつて見たけれど、お前の居處はつひに分らずじまひさ。

多津子。(愁然として) 貴方がそんなにして、わざわざ御捜しになつた時分には、私はもう、わざわざ貴方からかくれてゐたんでせうよ!

安岡。わざわざかくれてゐた?

多津子。いつの間にか私は、貴方に顔を合はさ

れないやうに……そんな、取返しつかない體になつてゐましたから。

安岡。ふむ。

多津子。つまりは命が惜しくて死にそくなつたのです。いいえ、殺しそくなつたのです——

あの子を! どうしてもあの子を殺せなかつたのです!

安岡。ふむ。

多津子。ですから、いくら貴方に會ひたくとも、二度ともう會へないやうな人間に——人間だから何だか分らないものになつてしまつたのです。そして會はないですむやうな場所へ場所へと逃げ廻つてゐたのです。

安岡。だが、運命は公平なものだ。俺は、永久にもうお前の姿を見失つたと知つた時、俺自身の姿をも即に見失つてゐた。俺は改めてやけになる必要もなかつた。長い間の心の不安定から來る放縱なだらしない習慣が、自暴自棄な人間のやるのとちつとも異はない事を、それまでにもしんさんさしてゐたのだから。そして近年はもう、自暴自棄といふほどのものさへなくなり、あるのは唯々救ふべからざる悪習慣だけなんだ。——(苦笑しながら) 自他ともに迷惑するやうな悪習慣

だけさ。

多津子。そこへ行くと、女はどうしても餘計に往生際が悪いのね。私は今でも忘れ残した過去を、すっかり忘れ盡してしまひたく、氣にたくなぬ將來をなるべく氣にしないのである爲めに、思ひ切つた馬鹿な眞似を、次ぎから次ぎへとしつづけて行かなくちやなりません。悪い夢のあとに一層悪い夢を見つづけて行かなくちやなりません。その夢と夢との間にどうかして、ちらりと一條の現實の光が射し込んで來るときの——その恐ろしさ、淋しさ、淺間しさは！

安岡。(いつの間にか多津子の背後に來てゐて、腕組みをして立つてゐて) それは俺にも解る！ 俺自身の事は俺が何だか解らなくなつてしまつたが、その代りに人の事は大抵解るやうだ！

多津子。(椅子を起つて、安岡の方へ半ばふり返りながら) 解つて下さる、本當に！

安岡。別してお前に就いて云ふと、むかしならば解らないでしまつたやうなお前の苦しみも悲しみも、一切のものがみんな解るやうだよ。

多津子。(安岡の前にかけてゐた椅子の方へ歩

き出しながら) 貴方がさうまで私を解つて下さるとしたら——いいえ私にだつて貴方が、貴方のことがよく解つてよ！ ですから、お互に斯うまで解り合ふやうになつたんだから、滿更無意味な事ぢやなかつたのね——あんな關係になつて、長い間別々に、あんな苦勞をして來たといふのも！

安岡。うむ。だが、あんまりセンチメンタルな哲學者になることは止さうよ。我々中年者には似合はしくない道樂なんだからな。

多津子。それもさうね。

安岡。(椅子にかけて) ところで、お前はあちらから歸つて來て、幾年位になる？

多津子。さうね。かれこれもう六年ばかりになるわ。貴方は？

安岡。俺はと——亞米利加東部の方を食ひつめたのは比較的早いだが、この日本の土地まで引上げて來たのは昨年の、いや一昨年の此頃だつたかな。

多津子。でも、どうして私のあるところが知れましたの？ それよりも音楽の先生として、駒澤桂子で通つてゐる今の私が、昔の貴方の多津子だつてことを、どうして御分りになつたの？

安岡。それは何だ。實は斯ういふわけなんだよ——だが、此邊で一寸——(咽喉を指さしながら) これを満らしてやりたくなつたね。

多津子。これは失禮。(呼鈴を押しながら) お話の方にばかり夢中になつちやつて！

安岡。いや、俺の方も忘れてゐたのさ。別に御遠慮を申し上げてゐたわけでもないよ。

お時。(左手のドアを開けてはひり) ああ、御呼びになりました。ごさいいますか？

多津子。あ、あ、紅茶を入れて來てお呉れな。

お時。はい、畏まりました。

安岡。(女中が出て行かうとしてゐるとき) 何か、アルコールのはひつた物を頂けませんか？ アルコホル分が體の内にきれてしまふと、妙に心細くなるんですからな。

多津子。ちや、ビールでも召上りますか？

安岡。左様同じ事ならば、キスキイかブランデエにでも願ひたいですな。

(女中のお時は不審の目を見張つてゐる。)

多津子。キスキイはありましたかしら？ あ、さうや、あれの新しいのを持つて來てお呉れ。

お時。はい、畏まりました。

多津子。あ、それから——君ちゃんはまだ學校

から歸つて来ない？

お時 はい。まだお歸りになりませんでござい
ますが。

多津子。歸つたらね、直ぐにこちらへ来るやう
につてね。

お時。はい。

多津子。(女中がドアの外に出てしまふと、多津
子は椅子を引き寄せてかけ) 本當に、どうし
てお分りになったの？ 私が此處に斯うして
ゐることが？

安岡 實はね、今日あるカップエで一杯やり
ながら、見るともなしに手近の新聞を見ると
——(ポケットを探りながら) たしかに見覺
えのある顔が——(多津子の前に疊んだ儘の
新聞を差出しながら) それにお前の寫眞が出
てるんだ。

多津子。(大急ぎで新聞を擴げながら) 私の寫
眞が、この新聞に！

安岡。さうだ。名前は駒澤桂子といふ、何だか
聞いたやうな、聞かないやうな名前だが、そ
の横顔の印象は、目元から口元へかけて、ど
うしてもお前だと思つたのだ。

多津子。あら？ 本當に出てゐるわねえ！
安岡。それから、其記事を読んで見るがいい。

多津子。まあ！ 駒澤桂子女史の——結婚です
つて！

安岡。その説明に面白い事が書いてあるぜ。名
物女の大年増が、年下の若い男と結婚する
のは、近頃流行物の一つだとさ。

多津子。何だか、そんな事も書いてあるらしい
のね。

安岡。若い醫學士の二十七歳は本當だらうが、
駒澤女史の三十五歳をわざわざ三十八歳にし
てあるなどは、あつた讀物を一層面白く
讀ますための新聞屋さんの御苦心かね。

多津子。だけど——(新聞から目上げて) 一
體どうしたんだらう？

お時。(キスキイの壺をもつてはひつて来て)
どうもおそくなりました。一寸口が取りにく
かつたものでございますから。

多津子。(キスキイの壺がコップと共に卓上に
置かれるのを見ながら) ああ、いいよ——さ
うして置いてくれれば。

お時。左様でございますか。
(お時は多津子と安岡との顔を見比べな
がら去る)。

多津子。(キスキイを二つのコップに注ぎなが
ら獨白的に) だけど、本當にどうしたんだら

う？

安岡。兎に角、俺は其記事を見て、お前が今何
處にゐて、何をしてゐるか、何をしようとし
てゐるかを知つたわけだ。そして——(キス
キイをぐつと一息にあふり) そしてお前に會
ひたくなつたのだ。

多津子。え？ 私に會ひたくなつたと仰しやる
の？

安岡。いや、然う言つたんぢや語弊がある。む
しろ會ひたくなつても、會はずにはゐられな
いやうな用事を思ひついたのださ。

多津子。その用事を仰しやる——
(安岡が黙つてコップを出せば、多津子も
黙つてお酌をする)。

安岡。(口へ持つて行きかけたコップを其儘下
へ置き) 凡そ人間の生きて行く方法は、稼ぐ
か、拾ふか、盗むか、でなければ貰つて歩くか
の、この四つに盡きてゐるやうだ。ねえ、さ
うぢやないか？

多津子。まあ、そんなものね。
安岡。(コップを取上げて一口呑み) ところで
だ、稼ぐのも拾ふのも、強盜竊盜を働くなん
だも、事の善し惡しは暫く措き、俺にはもう

面倒臭くてやれない。

多津子。(笑ひながら)さうらしいわね。

安岡。だが、それで矢張生きて行くとしたら、命のなくなるまで生きて行くとしたら、俺は結局、旦那様奥様方の御厄介になるよりほかはないぢやないか!そして成るべく氣毒に惑はるゝことの少いところから順々に厄介を掛けて廻るといふ、これだけが俺の最終の職業でもあり、最終の道徳でもあるやうだ。

多津子。道徳とやらの事は解らないけれども、そんな最終の職業をして廻る人にしちや、なかなかお人柄だことね。

安岡。だが、最終の職業も愈々その最終へ近づいて來た形だよ。

多津子。お得意様は、だんだんと減るばかりなの?

安岡。御察しの通り。

多津子。それぢや、私のところへも其職業をしにいらしたと仰しやるの?

安岡。うむ、序の用事は色々あるが、眼目はまあそれなんだ。

多津子。さうですか。

安岡。いや、俺もね、理由なしに來たんぢやない。(短き間)お前のお姉さんになる人とか云ふのは、何でも大層なお金持の坊ちゃんだ

とある。

多津子。ああ、この新聞ですか!此新聞にはさう書いてありますわねえ。

安岡。さうすると、當分の内景氣のいいお前の處へ來て、お前の御厄介になるのが、一番氣毒に感じないで済みさうだし、従つて、一番俺の道徳にもかないさうに思つたのだ。

多津子。ところが駄目よ。

安岡。駄目?

多津子。ええ。二人が結婚するつてことも、相手が大層なお金持だつてことも、みんないゝ加減な出鱈目なんだから。

安岡。みんないゝ加減な出鱈目だ?

多津子。これは、醫學士の——坊ちゃんが、自分から材料を提供して、わざわざ書いて貰つたものらしいの。

安岡。へえ!

多津子。實はねえ、斯うなの。(キスキを取上げて口をつけ)坊ちゃんは、私がどんな過去を有つてゐる女だか知らない、知つたら震へ上つて逃げ出す位な、本當の坊ちゃんにしてね、萬事を生真面目に考へて、この私とどうしても結婚しようと思ふんです。

安岡。ふむ。

多津子。そして近頃は、その事を頻りにやかましく言つてゐるんです。

安岡。ふむ。

多津子。ところで、私がちつとも本氣にならな

いでせう。

安岡。(笑ひながら)少しは、本氣になつてやつたらどうだ。

多津子。(同じく笑ひながら)なれるものならね。(短き間)でね、坊ちゃん相應な智慧をしぼつたんだわ。あんな記事でも新聞に出ると、それでなくては二人の間を可笑しく思つて居る、私の——まあ、パトロンと言つてきませうね、ハイラに。私のパトロンが其儘には濟まさないだらうし、それで綺麗に手が切れてしまつたら私の決心もつくだらうと、そこはね、坊ちゃん相應な分別ぢやありませんか。

安岡。成程ね、

多津子。だけど、一寸私も困るわ。

安岡。そのパトロンとの關係についてかい?

多津子。ええ、これを機會に切れてしまひたいやうでもあるし、それもまだ、少し早過ぎるやうでもあるし。

安岡。さしあたり——其坊ちゃんが、お金持で

もないとしたらばな。

多津子。(微笑しながら) 従つて、貴方の御職業も御生憎様ね。

安岡。さうだ、さう云ふことになるんだな。

多津子。(黙つて安岡に酌をしてやつたあと) だけど待つて下さい——貴方も此處でがっかりしてしまふのは待つて下さいな。

安岡。何か名案でもあるのかい？

多津子。あるわ——坊ちゃんなどの智慧よりか、少しばかりましなのが。

(此時右手のドアが少しばかり開きかかる。)

だあれ？

君江。(半分ばかり姿を現はして) 伯母さん、ただ今！

多津子。君ちゃんなの。お這入りなさい。

君江。でも、お客様でせう！

多津子。だけど、いいの。構はない御客様だから、はひつていらつしやい。

君江。(安岡が體を捻ちまげてふりかへつたので) いらつしやいまし。

安岡。(起ち上り) うむ、これがあの子か！あの君江か。(抱きかかへるやうに兩手を擴げながら近づく。)

(君江は驚いて多津子の方へ逃げるやうに寄り添ふ。)

多津子。伯父さんよ。君ちゃんの本當の伯父さんよ。今度外國から歸つていらしつたの。

貴女にはまだ、この伯父さんのことを話さないで済ましたかねえ？

君江。ええ、まだ。

多津子。これから、始終來て下さるのよ。

安岡。(前よりも一層センチメンタルに) これが俺の、俺とお前との——

多津子。私達の——(安岡の方へ目示しながら) 娘が、こんな可愛い娘になつててことを、貴方は、伯父さんは知らないでいらしたのね。

安岡。うむ。こんな可愛い娘が、俺達二人の娘なのか！ さうか！ (復び椅子にかけ) 脊丈

なんかもう、伯母さん位ありさうだな 學校は？ そろそろ女學校へあがる頃だね？

君江。本當は今年あがるところですけど、一年おくれましたの。

多津子。五つの歳に、脳膜炎をわづらひましてね、その爲めか、兎角學校の方がうまく行かないんですの、可哀想ですけども。

安岡。さうか。だが、少しばかりの智慧分別を

さづかつた代りに、並はづれて醜く生れて来た女なんぞも、あんまり仕合せぢやなからうからね。

多津子。さう思つてあきらめますのね。

安岡。それにこれからは、この伯父さんが家庭教師をして上げよう。まあ、お前もそこへ御掛けよ。

君江。(椅子へかけながら) でも、伯父さんは御忙しいんでせう？

安岡。いや、ちつとも忙しくない。それにこちらへは——(多津子の顔を見て) ちよくちよくやつて来る用事もあるんだからね。

多津子。さうそ、其用事に就いてですがねえ——さつきお話しした！

安岡。うむ、大切な話を其儘にしてゐた。一件の善後策として、何か名案があると云ふことだつたね？

多津子。私の名案といふのも、實は貴方の名案を拜借したやうなものなの。

安岡。と云ふと——

多津子。貴方はさつき、洋服を着た、綺麗な御嬢さんを御覧にならなかつたの？

安岡。うむ。一寸見た——ほんの後姿だけだが。

多津子。そして貴方はこの私を通して、あの坊ちゃんから、貰ふものを貰はうと御考へになつたでせう？

安岡。さうだ。

多津子。ところが私はね、あの坊ちゃんを通して、あの坊ちゃんから、貰ふ物を貰はうと考へたの！

安岡。なに？ あの坊ちゃんを通して、あの坊ちゃんから——ぢや、あの坊ちゃん、その坊ちゃんに結婚することになるのかい？

多津子。ええ、結婚して貰ふんだわ——私達の爲めに。

安岡。へえ！

多津子。名案過ぎると仰しやるの？

安岡。さうだね。さううまく行くものかどうか？

多津子。うまく行くやうにするんだわ！ 少々位の無理はしても！

安岡。ふむ。

多津子。貴方の口眞似をすれば、これが現在の、私の職業でもあり、私の道徳でもあると云ふわけですから。

君江。伯母さん、それは何方の事、私なんか知らない方のお話なの？

多津子。ええ。

(この時舞臺左手奥の方にてけたたましく自動車(おど)の音)

(耳をすまして)自宅の前で停まつたらしいのね。さつきお話ししたパトロンかも知れないわ。

安岡。(椅子を起しながら)それぢや、俺達はどうやらへか引き上げてゐよう。

多津子。ぢや君ちゃんは、このお酒をあちら(右手の隣を指さし)へ持つて行つてお上げなさい。

(君江は多津子に渡された御酒を盆の儘ささげて先に立ち、安岡と共に隣室に去る。あとに多津子は、卓上の新聞を小さく疊んで帯の間へ入れてしまふ。)

お時。(左手のドアを開き)あの、中塚様がお見えになりましたとございます。

多津子。中塚さん——でせう？

お時。はい、御差支がございませんでしたらば、お目にかけたいと仰しやいます。

多津子。今日に限つて、改まつたことを仰しやる——可笑しな人ね。それぢやね、此方はちつとも差支なんぞございせんから、どうか御遠慮なく御通り下さいましつてね。さう言

つて御上げよ。

お時。畏まりました。

(女中。出る。多津子、卓の上の灰皿などを始末してゐるところへ、無言の儘左手のドアから中塚幸藏がはひつて来る。

多津子。氣付きながら知らぬふりをしてゐる。中塚は多津子の傍をすりぬけるやうにして、卓の向う側へ行き、椅子を一脚ぐいと引き寄せる。)

多津子。(はじめて氣付きたること)おや、いらつしやいまし、そこまで御運びになります

のは、まだまだだいぶ、御暇のかかる事だと思つて居りました。

中塚。だしぬけにはひつて來たのが、悪い言ふのか？

多津子。いいえ、どう致しまして。まことに御念の入りました御前觸れもございましたことですから。

中塚。一體人を愚弄するもの、よい加減にして置いて貰ひたい！

多津子。あら、愚弄すると仰しやるの？ 私

が？
中塚。さうぢや。
多津子。愚弄すると云へば、貴方こそ、今日に

限つて——

中塚。いいや、今日の事ぢやない。あんたはこれまで、よくも私を！ これまでに満更氣付かないことでもなかつたが。

多津子。何のお話でせう？ ちつとも分りませぬね。

中塚。空惚けるのは止しにして貰はう。今になつてつまらんこつちや。

多津子。(はじめて氣付きたる如く) ああ、分りましたわ。(帯の間から例の新聞を取り出して卓の上に置き) これの事ですわね！

(中塚、黙つて、多津子の頭の天邊から足の爪端まで見上げたり、見下ろしたりしてゐる。)

(悠々と新聞を開いて、中塚の方へ向け) ここに出てゐる駒澤女史の結婚一件でせう？

(中塚、苦り切つたまま、依然として答へず。)

あら、そんな眞面目らしい御顔をなすつて、もう澤山よ——ごじやうだんは。

中塚。なに！ 御戯談やと？

多津子。もう止して下さいな、私共は少々ばかり江戸兒ですから、じやうだんもあまりいふこいのはいやですよ。

中塚。何がじやうだんや！ 何がじやうだんや！

多津子。(驚いたやうに) まあ、御戯談ぢやないんですか？ そんな御様子をなすつて！ いやですわね？

(二人とも暫くの間無言)

中塚。まさかと思つてゐた？——何が？

多津子。何が何でも、貴方はまさかと思つてゐましたわ。昨日や今日に初めて知り合つたといふわけぢやなし、河村さんの事だつて、前からよく知つてらつしやるし——あんな馬鹿馬鹿しい事を貴方までが本當になさうとは！

中塚。本當でない云ふのか。

多津子。本當。あるにもないにも——全く、馬鹿馬鹿しくつて！ (短き間) 私は貴方をそんな方だとは思ひませんでしたわ。さうですとも。世間見ずのお坊ちゃんなんかと違ひ、流石に苦勞をして來ていらつしやるだけに、何につけても解りのいい方だと思つて、それを

何よりのたよりにしてゐたんですもの。

(ハンケチを齒に食ひしぱり、暫くの間無言、中塚も小首を傾げてゐる。)

(ハンケチをベリベリと食ひ裂きて) よござんす！ 私も決心しました！

中塚。決心をした？

多津子。ええ。長々御厄介になりながら、御恩返しもしないでしまふのは、残念ですけれど、この場合致し方も御座いませぬ、兎に角今日限りでもう——御目に、かからないことにいたします！

中塚。ふむ。(短き間) だが——その後をどうする。

多津子。私も意地です！ 河村さんのところへ押しかけて行つて——あの人も面喰ふでせうけれど——さうです、河村さんの奥様にして頂きます。出来ても出来なくても 出来るだけの事をやつて見るのが私の意地ですから！

(椅子にかけ、中塚と見物とへ顔をそむけてゐる。)

中塚。しかし、惚れ合う仲なら兎に角やが、意地だけで一緒にゐるいふのは、つまらんこつちやな。

多津子。つまらない事だつて！ (再び顔をそむけて) どうせ、貴方なんぞに解るもんですか？ (口惜しげに涙聲で) 贅六者の貴方な

んぞに——私達の斯うした心持が——解る
もんですか！

(泣きじやくりしてゐる側に立ち寄り、中塚は腕組みをしながら黙然と見下ろしてゐる。)

中塚。(獨白のやうに) 一體、どうしたんやらうな！
(半ば獨白の様に) 私が早合點をしたといふのかな！

(多津子は、のぞき込んでゐる中塚の視線を避けながら、手早く涙を拭うて、くさり見物の方へ向き直る。)

事實でもないことを、事實のやうに思つてゐたのなら、私が悪い。私はお詫びをする。あなたも機嫌を直して呉れ。

(多津子、依然として沈黙、卓上のマツチをいちつてゐる。)

(強ひて笑顔を作りながら) さうまで機嫌を悪うせんでもよからうに、あなたも江戸兒なら、ちつとは、さつぱりしたところを見せて呉れるもんや。

多津子。だけど、あんまりですもの！

中塚。その事なら私が悪かつた云うてるぢやないか。

多津子。だつて私は、貴方がいらしたら御目に

かけて、笑話の種にでもしたい位に、それ位にしか思つてゐなかつたんですもの。それをあんな——

中塚。(手を振つて) もうよい。もうよい。

多津子。ちつともよかないわ。貴方もなかなか人が悪いから、口ではそんな事を仰しやりながらお腹の中ではきつとまだ、つまらない事を考へていらつしやるに違ひないわ。

中塚。いやもう、解つた。よう解つた。

多津子。それはねえ、あんな出鱈目な記事を書かれたのにも、よう考へて見ると、満更理由がないことはないの。

中塚。え？ 理由がないことはない？

多津子。ええ、實はね——まあお掛けなさいな。

(中塚、椅子にかける。)

實はね、河村さんも今度學校を御卒業だし、いい方があつたら、是非お嫁さんの御世話をしてあげたいつてね、さう思つてね、近頃折さへあれば、そのお話をしておましたの。

中塚。ふむ。

多津子。それがどうかして——(笑ひながら)

こんなお婆さんが、河村さんのお嫁さんになると云ふ、飛んでもない噂になつたのかも知れないわ。きつとそんな事だと思ふわ。

中塚。なる、ほどなあ。

多津子。ところで貴方、こんな序に何ふのは

何ですけれども、いいえ、こんな序でもなくつちや何びにくい事ですがねえ。

中塚。エライむづかしさうな話やな。

多津子。貴方の姪御さんのあの雪子さんは如何でせう？——河村さんのやうな、まだやつと學校を出たばかりのお醫者さんなんかには——

中塚。うむ。

(腕組みをして考へてゐる。)

多津子。人物はもう、改めて申し上げるまでもない事だし、それに第一御次男で、御自分の御家を繼がないでもないいでんですしね。

(二人とも暫く無言でゐる。)

河村。(帽子を片手にきげ、顔の汗を拭きながら、入口の近くに来て) 御免下さい。

多津子。(ふり返つて) おや、どなたかと思つたら——

河村。(二三步室内へ踏み込んでから、中塚の姿を認めて棒立ちとなり) 御客様でしたね！

中塚。ああ、河村君ですか？

多津子。(立ち上つて出迎へながら) さあ、どうかお掛けになって下さいな。

中塚。まあお掛けなさい。ちつとも構ひませんから。

河村。(誰にともなく一寸黙禮すると共に、あとしがりしながら)僕は別に、用事はないんです。また來ませう。

多津子。あら! どうしたの? いいぢやありませんか。

河村。でも僕は別に……

多津子。實はね、丁度いい處へいらして頂いたんですよ。

河村。え?

多津子。今ね、中塚さんと、貴方のお嫁さんの話をしてゐたところなの?

河村。僕の——(二人の顔を見較べながら)お嫁さんと仰しやつたんですね?

多津子。そんなにきまりを悪がることはないわ。いろんなお話の序にね——(河村に指示しながら)あの、ほら、雪子さんの事を伺つて見たところなの。

(河村は何の事ともわからず、目をぱちくりしてゐる。)

(中塚の方へ)本當にしやうがないんですよ。此の人は聴診器なんかかけて、仔細らしく小首をひねるところは御立派ですけれど、こん

な話をする、それやもう大變なにかみやさんでしてね。

中塚。いや、みんな若い内はさうしたもので、私なんでは今でもそれやからな。

(中塚の笑ふにつれて、多津子も大袈裟に笑ふ。)

お時。(左手のドアから入つて來て)あの、中塚様へ(會社の方から御電話でございます。)

中塚。(起ち上り)一寸失禮。

(女中と共に出て行く。)

河村。(さきに中塚のかけてゐたところと、多津子との間なる椅子にかけて)一體どうしたんです! 雪子さんの事といふのも、何の事ですか?

多津子。(微笑しながら)まあ、いいから、いい加減にばつを合はしていらつしやいな。

河村。ばつを合はせると云つて——(ちつと多津子の顔を見ながら)もう、そんな必要は……

多津子。兎に角、此場合面倒ですから、私のいい加減な出鱈目に、貴方もつき合つてゐて下さいな。

河村。だが、あの人はもう——(前に置かれた新聞を指さし)これを見たんでせう?

多津子。見るには見たんですけれど、仕合せと

あの人は本當にしませんしね、私にも一寸考があるんですから。

河村。仕合せと? あの人が本當にしないのを、貴女は仕合せだと仰しやるんですか?

(中塚がはひつて來る。)

多津子。ねえ、中塚さん、如何なものでせう?

——さつきの雪子さんの御話は?

中塚。(椅子にかけながら)左様。河村君の前やからいうて云ふでもないが、私は至極結構な事やと思ふ——あんな不束な奴でも貰うて頂くとすればな、だが、姉の考が——姉というても私には兄嫁の事ですがな——あれがどういふか?

多津子。さうですねえ、あの方には——(笑ひながら)もつともつと、ハイカラの人でなくつちやお氣に召さないかも知れませんね。

中塚。それに、當節の事やから、本人の考も一應きいて見んことにはな。

多津子。御本人の方は大丈夫らしいんですわ。ねえ河村さん、さうでせう?

河村。(詮方なく苦笑しながら)然う云ふ事は、僕には……よく分らないんですが。

多津子。(立つて大窓の方へ行きながら)あんまり一生懸命になつてゐるから分るものまで

分らなくなるんだわ。(カーテンを引いて河村の方へ直射してゐた光線を遮りながら)西日ははひりますから、少し暗くなりますけれど。(もとの席へ近く歸つて来て)斯うして面と向つてちや、(中塚へ)貴方にも仰しやりにくいんでせうけれど、全くのところ、河村さんの御熱心と云つたらないんですの。

河村。(多津子の方へ)あんまり、餘計な事は云はないで下さい!

多津子。いいちやありませんか? これ位のことろは。

中塚。(時計を出して見て)一寸會社の方へ顔を出して來んと工合が悪いから、(立ち上り)それちや河村君、お先きへ失禮。

河村。(ほつと息をついた様に)失禮しました。

(多津子、中塚を送つて出る。あとに頬杖をつき、暫く考へてゐた河村がやがて立ち上つて左手のドアの方へ行かうとした時、丁度多津子が引き返して來る。)

多津子。どうしたの?

河村。中塚さんは、僕達二人の間を何とも思つてゐないんですか? 何とも云はなかつたんですか?

多津子。ええ。

河村。いや、そんな事よりも貴女はあんな口から出まかせを云つて、僕にまであんな馬鹿馬鹿しいお附合をさして——一體あんな事をする必要があるんですか?

多津子。ええ、必要があるの。

河村。あんな出鱈目を云ふ必要が?

多津子。(椅子にかけて)本當はね、出鱈目ぢやないんですの。私は眞面目に、貴方のお嫁さんをお世話して上げたいと思つてゐましたの。

河村。眞面目に? 僕のお嫁さんを?

多津子。まあおかけなさいな。

河村。(椅子につまづきながら)眞面目に僕の——(辛うじて椅子にかけ)そしてあの雪子

さんと云ふ人を、僕のお嫁さんに?

多津子。眞面目な話つてものは、あんまり改まつちや、却つて切り出しにくいものですから

ね。一寸、あんな機会をつかまへて見たんですわ。

河村。それちや、貴女は、貴女は僕を……

多津子。あら! 誤解しちや困るわ。私と貴方とは——

河村。その關係はどうなるんです?

多津子。どうもならないわ。やつぱりこれまで

通りよ。これまで通りでいいぢやありませんか。

河村。そ、そ、そんな馬鹿げた事が!

多津子。出來るものかつて、さう仰しやるの?

河村。(極度に興奮して、椅子から突つ立ち上り)多津子さん! 廻りくどいことを言ふのは止して下さい! お互に適さかつてしまひたいならしまひたいと、なぜ貴女ははつきり云つてくれないんです。

多津子。困りますねえ——さう解らないんぢや。

(此時突然右手のドアに重い物のぶつかるやうな音がして、やがてそれから安岡禎が、蹣跚として出て來る。河村は驚いて見てゐる。多津子は一すふり返つて見ただけで、直にまた河村の方へ向き直り、河村の表情を見つてゐる。)

安岡。(足許危げに踏み止まり)もう、そろそろ我輩が出馬に及んでも、早過ぎはしない様だな。

多津子。丁度潮時よ——今が!

安岡。この坊ちゃんは何とか云つたつけな。うむ、さうだ、河村君! 苦勞をして來た奴はだね、餘り間違つたことは云はないものだ。

それで、君はその、さつきの話の御嫁さんをだね、いや、その御嫁さんのところへ、お姫さんになつて行くのが頗る、非常にいいやうだぜ。

河村。多津子さん！ どなたです？——此方は！

安岡。此方か？ 此方はつまりその……（多津子の方を指さしながら）ここにゐる古狸の……さうさな。

河村。（せき込んで）多津子さんと、どう云ふ御關係です？

多津子。さうね、以前はまんざら、路傍の人でもなかつたわ。

河村。と仰しやると——

安岡。（手をふつて）いや、待つた待つた。このけだもの共の昔の關係と、並びに今日の關係とをだね、詳しく説明して上げたなら、このお坊ちゃんにも少しは世の中と云ふものがさ、少しは分つて来るかも知れないね。そして此の場合に處すべく、聊か、氣の利いた分別がつくかも知れないね。まあ、君！ お互に、そこへ掛けようぢやないか。

（安岡につづいて、河村も掛けるところに幕。）

第二幕

（同じく多津子の内の客間。第一幕の時より三月ばかりを経過して、十月の半ば過ぎ、ある日曜の日の午前九時頃。前の時と異なるカアテンを、三分一ばかり引きたる、正面の大窓を通して、その季節らしき草木の色が見え、椅子なども其の季節らしき物に改められてゐる。傍て多津子と中塚とが左手のドアに近く、次ぎの會話をしはじめてゐるところにて幕上る。）

多津子。大それたお急ぎですのね。

中塚。うむ、今日のはな、夕刻でなければ来れるところだつたけれど、あの話だけは一刻も早う知らして上げたいと思つてな。

多津子。だけれど、いい鹽梅にお話が纏まりましたのね——御座様で。

中塚。なにせ、外ならぬ方からのお頼みやからな、私も骨を折らんわけに行かなかつたのや。

多津子。本當に、有難うございました。河村さ

んがどんなに悦ぶことですか？（笑ひながら）斯うお話がうまく行つて見ると、私なんぞ少々やける位ですわ。

中塚。（一様に笑ひながら）いや、あなたにも其内よい御姫さんを捜し上げる——私の方で黒焦げに焼けるやうなのをな。ああさうぢや、河村君の方へは、それぢや、あんたから知らしてくれませんか。

多津子。よござんす。直ぐに御手紙でも知らしてやります。

（多津子、ドアを開けてやる。）

中塚。（ドアの外へ半ば出ながら）だが、今度の一件についてちや私もえらい目に遭うたぜ。姉がまた生憎と記憶のよい方な、前に私が何の序にやら、河村君を悪う云うたのを、ちやんと覚えてゐくさつてな、改めてさうやない、まことにしつかりした人物やつて、なんぼ云ひ聞かしても聞き居らんでな。

多津子。それは面白かつたのね。きつと天罰よ——貴方が疑らないでいいあの人を疑つたりなんかした！

中塚。それでもな、今度の事で河村君への賠償も出来て、みんな帳消になつたわけや。は、は、は！

(中塚を送つて多津子も出てしまふ。はじめより餘り晴れやかでなかつた天が、愈々くもらはしくなつて来る。やがて多津子が引き返して来て、窓際に立ちて、物思はしげに雲行きを見てゐることしばらく。)

お時。(左手のドアを開き) 河村さんがいらつしやいました。

多津子。(ふりかへり、お時の後に河村の姿を認めて、出迎へながら) いらつしやいまし。さあ、どうか。

河村。(寧ろ悄然として入り來り) 朝つばから……構はないんですか？

多津子。いいえ、貴方よりも早いお客様が、丁度今御歸りになつたところなの。ほんの一足違ひだつたわ——中塚さんと。

河村。さうですか。

多津子。(自分もかけ、河村にもかけさせ、一寸ふり返つて見て、ただ二人だけなることをたしかめ) どうなすつたの？ 何だか御機嫌が悪さうね。

河村。ええ、少し——いや、かなり悪いんです。多津子。さう。だけど、その方がいいかも知れませんね。

河村。どうしてです？ どうしてそんな、思ひやりのない事を仰しやるんですか？

多津子。其の理合せに、あとではね、御元氣がよすぎる位になるんだから——きつと。

河村。それはどういふことでせう？ (短き間) 中塚さんからの御報告……の事ですか？

多津子。まあそんなしらじらしい聞き方をしないで！ だけど、昨日あの方が、雪子さんの御母様から伺つた御返事といふのが、どんな御返事だと思ひます？

(河村、だまつてゐる。)

それをきいたら、何が何でも、そんな不氣な様子をしちやゐられないと思ふわ。

河村。實は、それはもう聞いてゐるんです。

多津子。おや！ どなたから！

河村。雪子さんからの、いまし方の手紙で知つたのです。

多津子。早いのねえ！ 流石に！

(二人とも無言。)

だけど、それなら全く可笑しいぢやありませんか？ あんなお芽出度い話を、しかも雪子さん御自身から知らして貰つて、それでゐて、どうして然うなんです？

河村。少しわけがあるんです。

多津子。わけが……それは又どんな？ ねえ、どんなわけがあるんです？

河村。僕は、それをきいて頂くつもりで來たんですが——

多津子。ぢや、なほのこと早く、それを仰しやいな。

河村。何だか……つまらなくなつてしまつたんです。

多津子。私と話すのが？ それとも……暫くして、半ば獨白のやうに？ 本當にどうしと云ふんでせうね。あの時、安岡さんと二人で説法したり、骨を折つたりして貴方と雪子さんを近づけたりの結果は、少々藥が利き過ぎた氣味合で……何でもなかつた雪子さんがあんなによくなり、そして私の方は、すつかりおいできほりを食つちまつてさ！ ねえ、さうだつたでせう？ さうでなかつたとは云へないでせう？

河村。何も決しておいてきほりにしたと、さう云ふわけぢやなかつたんですが。

多津子。ぢや、どうなつたと云ふわけなの？

河村。それや、僕の貴方に對する心持も、あれまでとは別なものに成つたんですけれど。

多津子。随分なものに成つちまつた形ね。だ

けどまあ、それはそれとして置いて、兎に角あんなにまであの人の夢中になつて、随分氣を揉ましてゐたほどの貴方が、それぢやあんまり早過ぎはしないこと。

河村。早過ぎるつて、何がです？

多津子。貴方の、今度の氣の變りやうがさゝ事の纏まるまで大騒ぎをして、纏まると同時にけろりとするのが、いくら、男の人の通有性だからつて、貴方はあんなりだわ。

河村。僕のは、けろりとしたんぢやない！ 僕自身ちつとも變つちやゐないんです！

多津子。それぢや——？

河村。變つたのは雪子さんです、雪子さんの心です。

多津子。本當ですか？

河村。本當どころぢやない。あの人からの手紙には、はつきりとした言葉で書いてゐるんです——折角母も承知して呉れた今日となつて、何の理由とても擧げられないことだけれど、自分はどうしても結婚する氣になれなくなつたからと、はつきり書いてゐるんです。

多津子。まあ！

河村。そしてもう、二度と會ふことも出来ない

から——また、そんな自分の我儘勝手にお詫びのしやうも固より無いから、憎いところはどんなにでも憎んでくれと、さう書いてゐるんです——この手紙に、雪子さん自身が！

多津子。まあ、さうですか。

河村。ですから、多津子さん、貴女の前ですけれど——いや、正直に云ふと僕は、それだけでなくとも近頃貴女に對して濟まないやうな感情を有つてゐるんですが、兎に角、貴女の前ですけれど、僕は僕は、この一撃で以て、すっかり止めを刺されてしまつた。貴女のところへ來て、こんな泣事を言ひたくなるほどの目に遭つた。ああ（はじめて氣付いたらしく和服の懷から手紙を取り出し）これが其手紙なんです。

（多津子が起つて來て手紙の中味を受取り、黙つて讀んでゐる間に、河村は手に残されたる封筒の表を見たり、裏を見たりしながら、黙つて考へてゐる。）

多津子。（讀み了つた手紙を巻き納めながら）だけど……だけど、河村さんを嫌ひになつてゐないことだけはたしかだわ……冷静にこれを読んで見ると。

河村。貴女にはさう見えますか？

多津子。ええ。（短き間）これは何か——何かの行違ひが……さうよ。何か誤解のやうなものでもあるんぢやないかと思ふわ。

お時。（左手のドアを開き）あの、野々村様の御嬢様が御見えになつて居りますか？

多津子。（ふり向いて）雪子さんが見えてゐる？

お時。はい。

多津子。こちらへお通しすればいいに。

お時。でも、御客様かと仰しやいましたので、河村様が御見えになつていらつしやいますとさう申し上げましたら、あの……

多津子。御上りにならないと云ふ……ああさう。ぢや、私が出て見ませう。

（多津子、女中と共に出て行く。立つたり坐つたりしてゐた河村は、やがて卓の上の手紙を懷に入れ外廊の方へ出かけたが、途中で考へ變へ、左手の隣室へはひつて行く。そのあとへ、和服姿の雪子が多津子に導かれて居所の羊の如き有様にてはひつて来る。）

（河村のゐないのを氣付いて）おや、河村さんはどうしたんでせう？

雪子。丁度、よごさんしたわ。

多津子。何がいいのですか！

雪子。でも私はただ、先生にだけ御目にかか
るつもりで上つたんですから。ほかの方
は、どなたにも御目にかかりたくないん
です。

多津子。私よりほかの人には、誰にも、

雪子。はあ。(短き間) 實は先生にも、お手紙
を書いて見たのですけれど……やつぱりお目
にかからないぢや済まされなくなつたのです
わ。(俯いて 最後に、もう一度――

多津子。まあ！ 最後にですつて、私にまで？

雪子。先生もどうか――(愈々俯いて、セン
ティメンタルに) 御身體を……御大切にす
つて……

多津子。(ちつと雪子の様子を見入りながら)
なんだかいやなことを仰しやるのねえ。そん
な、つまらない事を考へるもんぢやないわ。
(調子をかへて) 兎にかく、かけてゐて下さい
な。河村さんと呼んで来るから。

雪子。どうか、先生、後生ですから！ それ
に幸あの方も會はないでゐて下さるのです
から。

多津子。でもね、私が貴女のために、是非是非
會つて頂きたいんですよ。
雪子。御目にかかつて、私はもう、なんにも

申し上げませんから、なんにも。
多津子。ぢや、それはあとにして――まあ掛け
ませうよ。さあ、貴女もどうか。

(多津子、先づかけ、つづいて雪子も詮方
なしに椅子へかける。)

それやね、どうしても御一緒になれないと仰
しやるなら、致し方ありませんけれど、そ
れにしたつて、つまらない行違ひが原因にな
つてゐたりするやうぢや、私達としても何だ
か残念ですからね。ですから、兎に角、もう一
度御會ひになつて頂いて、そして河村さん
も、何とか一應の御諦めのつくやうにね。
雪子。でも私には、御手紙で申し上げたより以
上の事は、申し上げられませんもの。
多津子。ぢや、斯うしませう。唯だ會ふだけ、唯
だあの人の言ふ事をきいて上げるだけにね。
切めて、それ位の事は、して上げるものよ。
貴女も、ね、いいでせう。

(雪子が答へに躊躇してゐた間に、多津子
は起つて隣室へ行き、間もなく、河村を連
れて来る。その物音に雪子は起ち上り、
半ば河村の方へふり向いて黙認すれば、
河村も黙認を返して立つてゐる。)
(河村へ) 今は雪子さんに申し上げた事です

が、どうしても御一緒になれないと仰しやる
のなら何とも致し方のない事ですけれど、そ
れにしたつて、つまらない誤解なんぞが其儘
になつてゐたんぢや、面白くありませんから
ねえ。(雪子へ) ねえ、貴女も如何です？――
いつそ思ひ切つて、何もかも仰しやつて仕舞
つちや。貴女の仰しやりにくい事があればあ
る程、河村さんの方ぢや一層ききたい事なん
でせうからね。

(河村、一二歩踏み出し、何か云はうとし
て云ひ流む。)

(思ひ出したやうに) ああ私一寸、時やに云
ひ附ける用事を忘れてゐましたから。

(自分を打棄てて行く後姿を、雪子はた
よりなげに目送する。多津子が右手のド
アの處にてふり返り、目示にて其の儘
にしてゐよと雪子に命令し置き、室を出
てしまつた後は緊張したる長き間の沈
黙。)

河村。(化石の如くなりし姿勢を辛うじて崩し、
片手を懷に入れながら) 御手紙は、さき程
拜見しました。

(雪子、返事する代りに、少しばかり河村
の方へ向き直りて差し俯く。)

河村。僕は意外でした。(短き間) 僕は何を、
あんな御手紙を頂くやうな事を何——をした
でせう。

雪子。(俯いた儘 私が悪いです！ (短き
間) なまなか、それを許して頂くよりも……

河村。え？ 何と仰しやつたの？

雪子。いつその事、いつまでも憎んで……憎ん
で頂きたうございます。

河村。憎む？ 何を憎むんです？ 理由もなく
行つてお仕舞ひになる、その不思議さを憎む
んですか？ それとも……理由のあるに係は
らず、仰しやらないでゐることに儘を、そ
れを憎むんですか？

雪子。(涙を拭ひ、目をあげてちつと考へた後、
再びうなだれて) やつぱり、理由があります
わ！ とてどもとて御一緒になんぞなること
の出来さうにもない悲しい……情ない理由が
あるんですわ！

河村。(稍々長き沈思の後、決然として) 雪子さ
ん、貴女は僕を、信用してくれませんか？ こ
の僕がどんなことをでも赦し得る人間だと云
ふ事を！ いえ、僕が赦す赦さないにかか
はらず、貴女が……心から、真心から悔い
改めて御仕舞ひになりさへすれば、貴女のな

すつたどんな事でもが、それでもう、綺麗にな
つてしまひます。それを信じませんか？ 僕
の爲めに信じてくれませんか？ (ずつと雪子
のそばに寄り) 強ひて、僕の前に告白しない
でもいい事……す。ただ心の中に悔いて、本當
に悔い改めて——

雪子。(のぞかれてゐた面を反けて) 私のは……
悔い改める……とも貴方から赦して頂くこと
も、神様から赦して頂くことさへも出来ない
やうな……罪惡よりも何よりも悲しい、情な
い事なのです！

河村。えッ！ 罪惡よりも何よりも？ (短き間)

雪子。(倒れさうな體を椅子に支へながら) 貴
方のこれまで……私は永久に……(ハンケ
チで面を蔽ひながら) これでお別れいたしま
す！

河村。(默してよろけながら河村の側をすり
ぬけ、左手の方へ行きかけたが、立ちど
まつてハンケチを顔からはなし、くるり
と向き直つて、右手の隣室へ駆け込んで
しまふ。)

河村。(茫然として立つてゐたのち、不圖思ひ出
したやうに雪子のあとを追ひながら) 雪子さ

ん！ 待つて下さい！ お別れする前にもう
一言！
(ひとたびしまつたドアを、再びあけて隣
室へはひる。そのあとへ、外廊からのド
アをあけ放し君江が駆け込んで来る。)

君江。(寢椅子に身を投げて、胸を叩きながら)
苦しい！ おお苦しい！

安岡。(外廊からのドアに近く現れて、庭の方
を見ながら) うむ、たうとう本降りになつて
來あがつたな。(室内へはひり、背後にドアを
締めて) もう少しで、つぶ濡れになるところ
だったね。

君江。ああ、苦しかつた。

安岡。(圓卓のそばの椅子に、君江の方に向い
てかけながら) だがよく、あんなに駆けられ
るもんだなあ——まるで兎かなんかのやうだ
つたぜ。

君江。あら、酷いわ——兎だつて！ 伯父さん
こそ本當にぐづぐづしてゐて、丁度……何か
のやうだつたわ。

安岡。何かのやうだつたは、面白いなあ。は、
は……

君江。だけど、つまらなかつたわね——、折角
楽しみにしてゐた今日の遠足も！

君江。……

君江。……

安岡。いや、お蔭様で俺は助かつたよ。前の日曜みに、一日中此御嬢様に引廻されたんぢややり切れないからな。

君江。あら、あんな悪い事を言つて！ いつも、私が勉強してゐるのも御構ひなしに、引張り出しに來る癖に。だから、伯父さんは嫌ひだと云ふのよ。

安岡。嫌ひでもいいが、君ちゃんは一體、どちらを餘計に嫌ひなんだい——伯父さんと伯母さんと？

君江。伯母さんはちつとも嫌ひぢやないわ。伯父さんみたいに私の嫌ひな事を云つたりなんかしないから。

安岡。(ポケットの煙草を探りながら) さうかねえ。

君江。だけど、伯母さんも……

安岡。伯母さんも？ 少しはいけない事があるのかい？

君江。(半ば獨白のやうに) こんな事は云ふもんぢやないかしら。

安岡。(興味をもつて) どんな事だい？

君江。(寢椅子から起つて、圓卓のそばへ來てかけ) 伯父さんは、私に何でも聞かして呉れるから、私も隠さないで云ふのよ。

安岡。うむ、それがいい。

君江。あのね、(短き間) 伯母さんはね、私を可愛がつて呉れるんだけれど、それや可愛がつて呉れるんだけれど、……ただね、二人つきりでゐる時でないとな、本當には可愛がつては呉れないの。

安岡。(沈鬱に) ふむ。さうか。

君江。私はね、それがいやなの。

安岡。さうか。

君江。私、何だかつまらないの。

安岡。(君江と見物とに顔をもむけて) 君ちゃん……御父さんが伯母さんの事を、知つてゐるのかい？

君江。伯母様から聞いたわ——私が生れると間もなく、亡くなつたんですつてね。

安岡。亡くなつた？

君江。本當は——伯父さんも御存じでせうねえ——本當は、赤坊の私を打つちやつといて、二人ともどつかへ行つちまつたんですつてね。

安岡。うむ。さうだ。俺もさう聞いてゐる。

君江。そんな悪い人達の事だから、よその方にお話しちやいけないつてね、いつも伯母さんが仰しやるのよ。

安岡。うむ。伯母さんの云ふ通りだ。

君江。だけど、そんな人達でも……まだ亡くなつて二人でなければ……生きていらつしやるのなら私も……

安岡。いや、そんな事は考へないがいい、考へるもんぢやない。

君江。(小さな太息をつき) さうでせうか。

(二人の會話の絶えたところへ、右隣の室から河村が出て來る。)

おや、今日は！ 河村さんよ！

安岡。(椅子にかけたままふり返り) ああ、河村君か？

(河村、默禮の後大窓の脇へ行き、腕組みをして壁によりかかる。)

(河村の様子を見て、自嘲の心持をも含みながら) 天氣模様はせぬか、今日はみんなが少しづつ興奮して見えるやうだなあ。(短き間)

河村君——いや、丁抹の王子ハムレット殿！ その御様子は如何なされた？ 煩悶とやらをなされるところかな。

(安岡の調子の可笑しさに君江も安岡と一緒に笑ひ出す。)

河村。他の場合とはちがひます。今日はからかふのはよしして下さい。

安岡。いよいよこれや、天氣のせめだな。

河村。僕は今、非常な地位に立たされてゐるんです。僕の最終の運命が、斯うしてゐる内に決定されるんです！

安岡。それは大變だ。オフイリアでもどうかしたのだね！

河村。折角あの人の御母様も承知して呉れた今日になつて……

安岡。あ、さうか。(短き間)察するに、本人が尼寺へでも行きたくなつたね。

河村。(覺えず腕組みを解いて)えッ！尼寺と仰しやつたんですね？

安岡。うむ。どうかすると、オフイリアの方から尼寺へ行きたいなどと云ひ出してね、若いハムレットを面喰はすものだよ。

河村。實際、さうです。雪子さんは、どうしても一緒に来ないと云ひ出したんです。

安岡。さうか。(頰杖をついて)ふむ、矢張りさうか。

河村。そして其理由を、直接僕にはどうしても話されないと云ふ理由を今、多津子さんが聞いて呉れてゐるんです。

安岡。さうか。(短き間)だが、餘計な事かも知れないな。

河村。なぜです？

安岡。なぜと云つて、世の中には、分つて見てもいらない事もあり、少しはあるからな。

河村。それでも僕は分りたいんです。今の場合の僕から云ふと、その爲めに、一層不幸な事にならうとも、分らずには、知らずにはゐられないんです。そしてもう三分か五分の内に、事に依つたら、此次きの瞬間に、一切が決定してしまふんです！

安岡。(椅子を立ちながら)さうだ、三分や五分の間なら大した事もない。ぢや、それまでのところ、折角煩悶して見るさ。その代り、運命の決定したあとで、あんまりへこたれないやうにね。(さきほどより一心に河村の様子を見入つてゐた君江へ)おい！俺達はあちらへ行つて少し休まうよ。

君江。(立ち上り、一緒に外廊の方へ出て行きながら)あちらへ行つて伯父さんは、またお酒を召上げるのねえ。

安岡。うむ、丁度、それを思ひ出したところさ。

(大窓を通して、外廊の上を右へ二人の姿が消えてしまふ。あとに河村が檻の中の獣のごとく、室内をぐるぐると廻つて

あるところへ、右手の隣室から多津子がはひつて来る。)

河村。(跳びかかるやうにして多津子へ近づきながら)何んと云ひました？どんな事を云ひました？

多津子。(微笑をふくんで椅子にかけながら)まあ、ここへ掛けるまで位御待ちなさいよ。

河村。(掛けながら)でも、どんな理由だと言ひました？

多津子。私もね、實を云ふと、少々心配になつてただけで、よく聞いて見るとね——

河村。つまりどうなんですか？

多津子。なんでもない事なの。

河村。なんでもない事ですつて？

多津子。さうよ、本當になんでもない事なの。なにしろ、あんな箱入の御嬢様だもんだから、つまらない事を大袈裟に考へてゐたんだわ。

河村。と云ふと——？

多津子。それはね、雪子さん御自身も近頃まで、忘れてゐた位の話なの。

河村。ぢや、あの人の、子供の時分の御話かなんかですか？

多津子。ええ、あの人のまだほんの子供の時分

に——内(うち)の君(きみ)江(え)位(ゐ)にもなつてゐなかつた時(とき)分(ぶん)の事(こと)だと云(い)ひますがね、御(ご)近(きん)所(しよ)の或(ある)る不良(ふりやう)少年(せうねん)に——

河村。(腰(こし)を浮(う)かして卓(チャール)の上(うへ)へ乗(の)り出(だ)しなが
ら)え? 不良(ふりやう)少年(せうねん)がどうしたのです?
多津子。雪子(ゆきこ)さんは随(ずい)分(ぶん)廻(まわ)りくどく云(い)ひました
がね。つまりまあ、それが雪子(ゆきこ)さんに、悪い
事(こと)をしたのよ。(短(みづか)き間(かん))雪子(ゆきこ)さんの體(てい)を處(あつか)ひ
女(め)でなくしたと云(い)ふのよ。

河村。(再(また)び椅子(いす)に腰(こし)を落(お)し 表(おもて)情(じやう)のない聲(こゑ)で)
さうですか。
多津子。要(よう)點(てん)はそれだけなの。そして自分(じぶん)で
も、其(その)時(とき)分(ぶん)ままだ子(こ)供(ご)の事(こと)でもあるし、あんま
り重(おも)大(だい)に考(かんが)へもしないで済(す)んだんださうです
がね、近(あたら)頃(ころ)になつて、貴方(あなた)を好(す)きな人(ひと)だと思(おも)
ふやうになつてかつらのことよ、忘(わす)れるともな
く忘(わす)れてゐた位(くらい)な其(その)一(いち)件(けん)が、だんだんと記(し)憶(えき)
の中(なか)によみがへつて來(き)たと云(い)ふんですの。そ
してね——

(さき程(ほど)から降(ふ)りしきつてゐた雨(あめ)に風(かぜ)も
加(く)はつたらしく、外(そと)に開(ひら)いてゐた窓(まど)の鏝(あて)戸(こ)か
なかなかかかたことと鳴(な)る。)
(起(た)つてドアの方(かた)へ行(い)きながら) ひどい風(かぜ)に
なりましたこと——

(多(た)つこ津(つ)子が外(そと)廊(らう)へ出(で)て鏝(あて)戸(こ)の音(おと)を止(と)めて
歸(かへ)るまで、河村(かはむら)は腕(うで)組(ぐみ)みをして幾(いく)度(ど)か太
息(いき)をついてゐる。)

(再(また)び椅子(いす)にかけながら)それでね。雪子(ゆきこ)
さんの御(ご)話(わ)はつまり斯(か)うない。貴方(あなた)がたの御(ご)
結(むす)婚(こん)に、いよいよお母(はは)様(さま)も御(ご)賛(さん)成(せい)だと云(い)ふ事(こと)
にまでなつて見(み)ると、昔(むかし)の其(その)事(こと)件(けん)が氣(き)になつ
て、ゐても立(た)つてゐられないういふんです。
雪子(ゆきこ)さん御(ご)自(じ)身(しん)の言(こと)葉(は)で云(い)ふと、過(す)ぎ去(さ)つた
昔(むかし)のその汚(よご)點(てん)がね、はてしもなく大(おほ)きく擴(ひろ)が
つて來(き)て、これから先(さき)きの生(せい)活(かつ)を、すつかり
包(つつ)んでしまつて、眞(ま)暗(くら)にしまふといふわ
けですわ。(俯(うつむ)いてゐる河村(かはむら)の顔(かほ)をのぞき込
み)ねえ、それで分(わ)つたでせう?

河村。(俯(うつむ)いたまま)よくわかりました。

多津子。でね、私は斯(か)う云(い)つてやりましたの——
そんな事(こと)はなんでもない、世(よ)間(かん)にはざらにあ
る事(こと)なんだけれど、他(ほか)の人(ひと)達(たち)は格(かく)別(べつ)氣(き)にもし
ないし、口(く)に出(で)して云(い)ひもしないだけだつて
ね。それは實(じつ)際(さい)さうでせうからね。(笑(わ)ひな
がら)もつとも、私は直(ちやう)接(せつ)に經(けい)験(けん)したわけ
でもないけれど。(河村(かはむら)がふと上(あ)げた面(おもて)を見(み)
咎(とが)めて)あら! どうしたの?——そんな様(よう)
子(こ)をして! もつと安(あん)心(しん)したらしい顔(かほ)を見(み)せ

てもいいぢやありませんか?

(河村(かはむら)、またも無(む)言(ごん)の儘(まま)に太(おほ)息(いき)をつく。)

いやですねえ、河村(かはむら)さん! (短(みづか)き間(かん))貴方(あなた)
までが雪子(ゆきこ)さん同(どう)様(さま)な、子(こ)供(ご)らしい事(こと)を考(かん)
るんですか?

河村。(腕(うで)組(ぐみ)みをほどこきながら)それや、子(こ)供(ご)
しい考(かん)へかどうか知(し)らないんですが……
多津子。さうですか! 貴方(あなた)までがさうです
か!

河村。兎(う)に角(かく)貴女(あなた)の仰(おほ)しやるやうな、何(なん)でも
ない問(もん)題(だい)ぢやないと思(おも)ひます。

多津子。(獨(ひとり)白(はく)のやう)さうですかねえ!

(二人(ふたり)とも暫(しばらく)の間(かん)無(む)言(ごん)。)

(強(きやう)い調(てう)子(こ)で)だけど、河村(かはむら)さん。貴方(あなた)はさ
う仰(おほ)しやつたさうぢやありませんか?——雪
子(ゆきこ)さんがよい、何(なん)か悪い(わるい)事(こと)をして、そしてそれ
がどんな悪い(わるい)事(こと)であらうとも、みんな赦(ゆる)して
上げるつて! 貴方(あなた)は雪子(ゆきこ)さんの犯(とが)したどん
な罪(つみ)惡(あく)をでも赦(ゆる)して上げようと思(おも)ひながら、
あの人(ひと)に何(なん)の責(せき)任(にん)もない——狂(きやう)犬(いぬ)にでも噛(か)
まれたのと同(どう)様(さま)な、あの人(ひと)のただの災(わざ)難(なん)に過(す)
ぎないものを——それを咎(とが)め立(た)てしようと思(おも)
ふんですか?

河村。僕は咎(とが)め立(た)てするんぢやない。いいえ、

咎めることの出来ないのです！

多津子。それならば、なぜ——

河村。なぜ、それ程氣にするかと仰しやるんですか？

多津子。ええ。なぜ人の災難を、その人の罪以上に扱ひます？

河村。それは——人の罪惡なら、赦してやる方にも大きな満足がある。けれども人の災難に對しては、咎めたくも咎めることの出来ないやうなもので、齒がゆさがあるばかりです！

多津子。さうですか。さう云ふ理窟ですか。

河村。いや、理窟は貴女がいはしただけで、根本は理窟の問題ぢやない。

多津子。それぢや、つまらない理窟なんぞぬきに、貴方の感情は——貴方の趣味はどうしても、雪子さんと一緒にある事を計さないといふんです。あれだけ熱してゐた貴方が、あんな事柄の爲めに！

河村。待つて下さい。まあ、待つて下さい。そんなにわけもなく冷却してしまふほどの熱情だつたらば、僕も斯うまで苦しみます。僕は、いいえ、僕も雪子さんも共に……復讐することの出来ない打撃を受けたのです！（頭

を抱へながら）全くのところ、どう——いいものか、分らなくなつて來た。實際どうしていいものか！

多津子。（太息をつきながら再び獨白のやうに）少し大袈裟のやうだけれど、やつぱり、さうしたものでせうかねえ。

（此の時、右手奥の方にて、突然の喧噪を生ず。無言の儘に多津子はふり返り、河村は彈かれたやうに起ち上つてゐる。）

君江。（ばたばたと駈けて來て、左手のドアを開くより早く、雪子さんが！ 雪子さんが大變よ！

河村。えッ！

多津子。（河村と殆んど同時に）えッ！ 雪子さんが！

（ドアに立ち塞つてゐる君江を突きとはすやうにして、河村が隣室へ駈け込めば多津子もつづいて駈け込む。奥の方では新しき喧噪を加へて來る。間もなく多津子が右手ドアから左手ドアへ駈けぬける。多津子が引返して奥へはひつた後に、二三人の男女が、或は左手ドアから或は外廊からはひつて同じく右手ドアへ駈け込んでしまふ。そのあとの空虚なる

客間へ、雨も止み風も落ちたる後の爽かなる光がさし込んでゐる。やがて、手に

キスキの壺を下げ、大窓の外を過つて、ふらりふらりとひつて來た安岡が、室の中央に立ち、或る椅子の背につかまりながら、あたりを見廻してゐるところへ、

右手ドアからお時がはひつて來る。）
安岡。なんだか騒々しいぢやないか。
お時。（一寸立ちどまり）あら、御存じでいらつしやいませんか？

安岡。うむ。何事であるか、一向に御存じでいらつしやらないのだ。

お時。雪子様が、あの野々村様の御嬢様が、大變な事を——

安岡。なに！ 雪子さんが！

お時。あの二階のすりから御落ちになつたので御座います。

安岡。二階から落ちた！

（それまで泡へてゐた壺をガタリと卓の上に置く。その音に驚き、お時は自分の用事を思ひ出したらしく、すたすたと外廊の方へ出て行つてしまふ。安岡は右手ドアの方へ近づいたが、それに手を掛け、大窓の脇の處へ行

きてその壁に背をもたせ、腕組みをし、がくりと首を垂れて考へ込んでゐる。そこへ奥から河村が出て来て立ち止まり、安岡と顔を見合はせる。

駄目か？

河村。駄目です！

安岡。打ち處が悪いのか？

河村。なにしろあの高い涯の下へ落ちたのです。それに悪い物を……

(毒藥を吞む手眞似をする。)

安岡。毒藥かい？ (河村のうなづいたのを見て) しかし、君は隠者ぢやないか？

河村。ところが駄目です。自分でわざわざ工夫した藥品だけに、解毒の不可能であることも、自分が一番よく知つてゐるんです。

安岡。さうか、その毒藥は君自身で！

河村。(半ば獨白のやうに) 本氣に誰が吞むつもりでも、誰に吞ませるつもりでもなかつたが……

安岡。いや、さうした氣まぐれから、さうした結果になるのは有勝ちの事だ。

河村。貴方は、あの人がどうして……どうして死んだと思ひます。

安岡。いや、それは聞くまい、若い女の死んだ

時、その原因を知るものは、一人でも少い方がいい。

(此時左手のドアが大きく八文字に開かれて、眞白き襦をかけた雪子の死體が、臺に乗せたる儘靜肅にかき込まれる。それに附き添うて多津子君江などもはいつて来る。)

お時。(外廊の方から聲高に) 一寸、待つて下さいな。こちらの方を、少し片附けなくちや通れませんから。

多津子。ちや、(大窓の前一間ばかりの處を指さし) そこいらへ置いて、あちらを手傳つてやつて下さいな。

(椅子などの上に死體の臺を据ゑ置き、その手の者兩三人に君江もつづき、外廊の方へ出て行く。安岡は一二歩踏み出して腕組みを解き、眞白き襦をつくづくと見下ろしたる後、見物へ顔を反けるやうにして寝椅子のところへ行き、ごろりと横になる。河村と多津子とは大窓からはひる前よりも一層朗らかなる光を背に受けながら、死體を目の前に、相並んで立つてゐる。次第に頭を垂れてきた多津子は遂に堪へがなくなり、ハンケチを口にあて

て咽び泣く。それに促された河村も、横へ向き涙をかくしながら泣く。)

(泣き止んでハンケチを取り) 河村さん！

河村。(横を向いたまま) 何ですか？

多津子。雪子さんももうこの眞白い布のやうに、雪のやうに綺麗になつたでせうね！

では貴方にこそさう思へるでせうね？

河村。(正面へ向き直つて) いいえ、雪子さんは、はじめから純潔でした。純潔でなかつたのはむしろ僕なのです。それがはつきりと分つて来ました。

多津子。(進み出でて河村の手を取り、更に布の端をかきのけ、雪子の手を河村の手に握らせ) スうして此手を握つた貴方は、雪子さんが純潔だつたやうに純潔になります。きつと出来ます。他の事はみんな忘れてしまつても、どうかこれだけは忘れないでゐて下さい——

私が雪子さんの此冷たい手を、貴方の手の中に置いたと云ふことをね、雪子さんの此純潔な此冷たい手を！

河村。(雪子の手を、そつともとの位置へ返しながら) この手は決して冷たい手ではなく、私の手よりもずっと温かでした！

君江。(外廊からはひりながら) あちらも片付

きましたから。

(君江につづき、先きほどの男女二三人がはひつて来て、大きく開かれたドアより外廊へ、静肅に運び去る。それに付き添うて君江河村なども出て行くのを、多津子は黙然として目送し、やがて圓卓に残れる一脚の椅子にかけ、頬杖をつき、俯いて沈思をつづけてゐる。安岡、身を起して手近のベルを押す。)

お時。(はひつて来て多津子へとも安岡へともなく) 御呼びになりました。ごさいますか?

(安岡、手眞似で、盃を持って来いと命ずる。)

あの盃でございいますか?

(安岡、うなづく。やがてお時が盃を持って来る。安岡、再び圓卓のキスキイを指さし、自分のところへ持つて来させる。女中の去つたあと、自分でもキスキイを注いでぐつと呑み干し、二杯目を注ぐ。)

安岡。(多津子へ) おい、どうした?

(多津子、頬杖をついたまま、目を上げて安岡を見る。)

すつかり考へ込んでしまつたな。なにか氣の

利いた考へでも出て来たかい?

多津子。ええ、少し賢くなつたやうに思ひます。

安岡。さうか。

多津子。世の中は、年の行つたものが、若いものを賢くする。とばかりとも云へませんのね?

安岡。うむ。

多津子。(輕い調子で) 済みませんが、一寸そのベルを押して下さいな。

(安岡、ベルを押してやる。二人の暫く無言であるところへ君江がはひつて来る。)

君ちゃん! 丁度貴女を呼びたかつたの。こちらへいらつしやい。

(君江、多津子の様子を怪しみながら近づく。)

こちらへいらつしやい——もつと。

(身近く寄つて来た君江の兩手を取り、ちつと其顔を見入る。)

君江。伯母さん! どうしたの?

多津子。私をね。此の伯母さんをね……母さんと云つて御覽なさい!

(君江、不思議さうな顔をして、無言の儘である。)

ね、さう云つて御覽なさいな、さう云つて! 君江。(機械的に辛うじて) かあさん!

(多津子、君江の手を引き寄せて抱きしめる。)

ちや、本當に……(多津子に抱かれた儘目を見て) 本當に、本當に私の……

(やがて多津子の手をのがれて起ち、多津子の視線の安岡に注がれてゐるのを見るや否や、ぐるりと安岡の方へ向き直る。)

ちや、あの伯父さんは……私の……

(安岡、うなづきながら、手を舉げて招く。君江は駆け寄つて安岡の足下に跪く。)

(狂喜の聲を張上げて) ちや、伯父さんは父さんだつたの! 父さんも、母さんもあつたの! (安岡の膝に頭を埋めて啜泣泣きながら) 私は! 私は!

(安岡、黙つて其背を撫でてやる内に、嗚咽の聲も次第に納つて来る。多津子は先刻より、自分の胸を撫でながら安岡と君江を見やつてゐる。)

中塚。(外廊から駆け込んで来て) あ、こちらか! 多津子さん、一體どうしたんや、今度

のことは!

多津子。(椅子を起つて) まことに可哀想な事をいたしました。

中塚。どうして、こんな無分別をしたもんや

ろ？ あんた、其理由を御存じないかな？

多津子。（冷然として）云つて見れば、私がある方を殺したやうなものでございます。

中塚。えッ！

多津子。私が表面にはあの人達を近づけながら、内實は戀の邪魔をしてゐたのです。

中塚。あんたが邪魔をしてゐた？

（君江、此頃より中塚、多津子の對話に注意を拂ふ。）

多津子。その結果が、罪のない娘さん一人を、氣毒な犠牲にしたのです。

中塚。それぢや、あんたは矢張……（多津子の身近く詰め寄せて來て）あんたは何んぢやな……

君江。（中塚と多津子との間に飛込むやうに）伯母さんは私の母さんだつたわ！ 本當の母さんだつたわ！

中塚。え？ なんぢや？

（驚き異んで、君江と多津子との顔々見比べる。）

君江。私には、母さんも父さんも——（安岡を指さし）父さんもあつたんだわ！

（中塚、安岡の方を一瞥すると共に、覺えずたじたと二三歩退き、呆然として立

つてゐる。）

ああさうだ！ 時やにも、みんなにも知らしめてやらなくちや！

（君江は、雀躍りしながら駆け出して行く。）

中塚。（辛うじて意識を回復して）いや、今日の場合、こんな話でもないもんぢや。うむ、さうぢや。

（後退るやうにして出て行く。その足音の消えるや否や、多津子は倒れるやうにして椅子へかけ、荒々しい息遣ひをしてゐる。）

安岡。だいぶ苦しさうだな！（君江が膝をはなれてのち、またも頻りに傾けてゐた盃を差しながら）どうだ、ひとつ上げようか？

（多津子、安岡のところへ行き、相並んで寝椅子にかけ、黙つて盃を受ける。安岡、黙つてキスキイを注いでやる。）

多津子。（盃を心持さし上げながら）だけど、これは一體どう云ふ盃なんでせうね。

安岡。（仰向いて瞑目しながら）さうさな。どう云ふ盃かなあ！

多津子。何もかも、みんなが新しくなると云ふんでせうか？（短き間）新奇時直しと云ふ

んでせうか？

安岡。いや、新奇時直しだけは待つて呉れ。多津子。どうして？

安岡。どうしてと云つて——俺達はまだ、無駄な苦勞といふものは、一遍もしたことがないからな。

多津子。それはさうね。私達二人のこれまでの生活も、やつぱり、一遍は通らなくちやならない道筋だつたのね？

安岡。兎に角、これで一段落と云ふものだ。（多津子、盃を乾して安岡に返し、お酌をしてやつてゐたとき、こん、こん、ごおんと鐘が鳴り出す。）

（盃を持つたまま立ち上つて）火事かと思つたら……

多津子。（笑ひながら）ニコライの鐘よ！これから禮拜が始まるんだわ！

安岡。さうか。今まで氣にも留めなかつたが、なかなかいい鐘だなあ！

（再び鐘の鳴り出すところに幕。）

（一九一九年四月作）